

氏 名（本籍）	あら 荒	かわ 川	やすし 康（神奈川県）
学 位 の 種 類	博 士（社 会 学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 3604 号		
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	社会科学研究科		
学 位 論 文 題 目	空間の公共性に関する環境社会学的考察		
主 査	筑波大学教授	文学博士	鳥 越 皓 之
副 査	筑波大学教授	博士（社会学）	若 林 幹 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士	松 村 和 則
副 査	筑波大学助教授		樽 川 典 子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、現代社会に生起している諸問題のうち、空間や環境を焦点として語られ、問題化されているものについて扱っている。なかでも、空間における公共性が問題視され、さまざまな人びとによって具体的な行動がなされている事例を中心的にとりあげることで、生活空間を取り巻く環境の破壊と創造のしくみを分析し、その上で、今後の環境政策に必要と思われる諸点を提示している。

第1章では、本論文の方法論にかかわる諸問題について検討している。環境問題とはその拠って立つ立場によって異なった様相を示す。そのため、環境問題の社会学的分析にあたっては「誰にとっての、どのような問題が解決されたら、当該環境問題が解決したといえるのか」についての見取図を、研究者自身が示すことで、自らの立場性を明らかにする必要があると筆者は判断している。本論文ではこれを、実際に問題をかかえている人、なかでもその問題を最も切実なものと感じている人びとの立場から考えるという方法を選択している。それは、当該問題を最も切実に抱えている人の目から見たときの問題解決こそが、現代社会において強く要請されていると筆者が考えたからである。

こうした人びとの立場に立つために、本論文では、実際に現地に赴いて関係者に対面してインタビューするというフィールドワークを採用している。その上で、人びとの語りの底を「方法として理解できる地平」に立って記述するという方法を試みている。この彼／彼女と私の間に理解できる地平があるとして、その地平において相互に了解された「問題」についての社会的意義を分析することが、本論文で用いている方法である。

第2章から第5章までは、第1章で示した方法に基づくケース・スタディとなっている。

第2章では、熊本県合志町の新興住宅地でおこなわれた公園づくりを事例にして、空間の公共性のもっている構造について、概括的に提示している。「すずかけ公園」が地域の人びとの手によって計画され、建設されていったとき、その新しく生まれた空間に存する公共性とは、オフィシャルな意味における公共性とは異なっていたのである。それは、空間に対する愛着という形で示される「場所性」と、その空間を「この地域に住む人のもの（『すずかけのもん』）」と表象することを通じて人びとを結びつける「共同性」から成るものであった。こうした2つの新しい関係性を生み出すに至ったのは、地域の関係性自体を問う根本的な問いかけによる日常の関係性からの自由と、その地点から自らをも含む新たな関係性を組み上げ、選択する自

由である「関係性の自由」を人びとが手にできたからであった。しかし、この「関係性の自由」を手にできる条件は、地域ごとに異なっている。「すずかけ公園」では、こうした自由を手にするだけの「自己決定性」が、公園づくりのプロセス内に存在していたことが、新しい公共性を生み出した大きな要因であった。

第3章では、霞ヶ浦流域でおこなわれた水質浄化活動の事例を通じて、第2章で示した諸概念の中身を具体的に明らかにした。比較的伝統的な人間関係が存在する事例地において、排水路として臭いを発するまでに汚れてしまった小川に対し、炭を用いて浄化する活動が展開された。この活動は有志2名によって開始されたが、そもそも炭の浄化能力には限界があり、この2人の活動だけではほとんど効果がないと考えられた。しかし実際には、次第に多くの人びとの賛同を得て、所期の目的をほぼ達成することができたのである。

彼らがとった戦略とは、地域に存在する諸関係から相対的に離れたところで、ただ黙々と活動するという、それだけであった。ところが、こうした行為は、地域に住む人びとにとって、地域に存在するいかなる関係性にも回収することができないために、ある種の不安を引き起こした。そこで人びとはその不安を解消するために、活動する彼ら2人の内心の意図を探りはじめたのである。そしてついに「純粹にアンコウ川をきれいにしたい」という2人の思いを探り当てたとき、人びとはそれを自分に対するメッセージであるかのように受け取っていったのである。なぜなら、彼らこそ、アンコウ川を汚している張本人だったからである。

こうして人びとは、自分の足元にある関係性に対する根本的な問いに自ら直面するなかで、地域に存在する関係性から相対的に離れたところから、それらの関係性を位置づけなおす「自由」を手にしていったのである。そしてその「自由」によって自己決定したものの多くは、たとえあからさまでないにしても、2人に対する、何らかの形の応答となってあらわれたのである。さらにその応答が「同じ立場にある者同士の交換」として行われたとき、ブラウ（1964 = 1974）がいうように、彼／彼女と私の間にある社会的絆はしだいに強化されていき、「共同性」が生まれたのであった。このようなカラクリをもって、アンコウ川の水質浄化という問題は、人びとの間で「公共化された問題」として地歩を固め、さらに問題解決への志向性を高めながら試行錯誤を繰り返すという、創造的な営みが継続していったのである。

第4章では、近世から続く墓地山の開発問題を取り扱っている。高知市の西北にある小高坂山・丹中山は、江戸の初期から今日まで墓地山として利用されてきた。ところが、都市計画によって、この空間は主として住居建築のための用途に指定されたため、開発業者の手によって開発されることになった。こうした動きに対して、地元の自治会や墓の所有者、あるいは歴史愛好家などが中心となって反対組織を立ち上げ、運動が展開された。しかし、運動の旗印として自然保護を用いた小高坂山グループは、自らの拠って立つ言説を十分に説得的に展開できなかったために、結局は条件闘争へと転換後、開発は強行されることになった。一方で、高知の歴史を象徴する墓を守ることを宣言した丹中山グループは、開発業者の強引なやり方によって、墓碑の周囲を5m以上も掘り崩されても抵抗姿勢を崩さず、現在も裁判を含め係争中である。なぜこれほどまでに粘り強く運動を続けることができるのかを、本論文では、先頭に立って運動を引っ張っている野田氏の歴史観から説明している。墓そのものには何のゆかりもない野田氏にとっても、丹中山の象徴する「高知の歴史」とは、具体的に、実際に、ある時代をこの高知で暮らしてきたその生きざまそのものの堆積のことであり、墓碑はその証なのであった。野田氏には、「高知の歴史」に生かされ、またそのなかを生きているという、確かな感覚があったのである。したがって、開発業者による丹中山開発は、野田氏や運動を支援する人びとの目には、自らをも含んだ「高知の歴史」を根こそぎにする行為として映ったのであった。丹中山にある坂本龍馬ゆかりの墓地を中心とした公園化が政策課題として浮上したとき、野田氏を中心として新たに提唱された「里山としての丹中山の保全」とは、こうした「高知の歴史」を大切に思う人たちによって生み出される「コモンズとしての墓地山」を目指したものということができる。このような空間のコモンズ化は、空間の公共性を豊かにして行くための今後のあり方に、大きな示唆を与えるものということができるだろう。

続く第5章は、自然環境保護制度と地域住民の空間をめぐるせめぎあいについて検討している。栃木県市貝町にある多田羅沼は、1970年代に稀少な湿生植物が生育する場所として自然環境保全地区に指定された。ところがこうした地域指定以後、それまで美しい姿をみせていた稀少な植物群は次第に減少し、近年では湿

地も乾燥化して林地へと変貌してしまった。これは、自然保護制度という空間に対する網掛けが、空間に存する「問題」の定義を独占したために、その場所との長年のかかわりから「ボサになっている（荒れてしまっている）」と判断する地元の人たちを無視した結果であった。本論文ではこうした「政府の失敗」に陥らないために、ガバナンスの視角の重要性を示唆した。ガバナンスとは、ある問題解決のための枠組を示す全体秩序を構想するものではなくて、その秩序化を目指すプロセスに注目した概念である。そのためガバナンス論が強調するのは、各アクターによる問題解決へ向けての志向性と、具体的な実践の重要性であり、各アクターの組織内効率化や透明性の確保の大切さである。事例地では、「市貝町里山の会」という地元の有志組織が、「政府の失敗」を相対化するガバナンスの視点から「問題」を再定義するアクターとして有望であることを示唆した。

結章では、4つのケース・スタディで得られた知見をまとめ、公共性論や都市社会学、コモンズ論などにおいて本論文がどのような位置にあるのか、そしてその意義はどのようなものといえるのかについて呈示した。主として都市社会学で展開されてきた空間と公共性に関する議論は、モデル化の段階において、その空間に生きる人間像をあまりに抽象的なものに仕立て上げてしまったために、「フロー化する社会」に対して十分抵抗性をもった存在として描き出すことができなくなってしまう。そこで本論文では、自らが推参し、かつその中を生きるという「両義的伝統」を生きる人間、すなわちある種の実存的契機を含んだ文化レベルの人間像をモデルの中に組み込むことで、モデルをリニューアルすることを提案している。その上で、空間の公共性を豊かにするために、従来のコモンズ論が陥りがちだった資源管理の発想を転換して、ガバナンスの視角を導入することの有効性を提示したといえる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は環境社会学のうちでも、公共性の強いコモンズと呼ばれることの多い空間を対象としている。具体的には公園や墓地や沼などを分析の対象としているが、これはいわゆる自然のうちでも、もっとも人間の生活に近い自然であり、人間によって甚だしく加工された自然である。このような自然のあり方を分析しようとする視点は、現在の地区の開発というミニ開発のありようとかかわって、実践的にも意味のある研究である。

本研究は従来のコモンズ研究が管理論に陥りがちであることに疑問を呈し、ガバナンス論の視角から分析することで、地域でのあたらしい秩序のあり方、開発のあり方を具体的に提示できた点を高く評価できよう。

ただ、都市社会学や社会学のガバナンス論についての学説史的な位置づけに弱点がみられた。しかし、そのことは本論文の価値を著しく損なうものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。